

(経典とは何か—経典の成立と展開受容—2011年日仏発表原稿レジュメ)

インド仏教における『法華経』の成立と展開

片山由美

初期大乘経典の一つである『法華経』が一切衆生には仏になる可能性があるという一乗思想を表明していることはよく知られている。法師(dharmabhāṅga)達はこの一乗思想を表明するために「三止三請」物語を創作した。同物語は、シャーリプトラが声聞乗の絶対的な価値を否定する釈尊に対して、釈尊の真意の開示を三度請うというものである。同物語は、仏伝の中でも最も重要な出来事の一つである「梵天勧請」説話を模して創作されたものである。梵天の勧請が「初転法輪」の契機となるのに対し、シャーリプトラの「三請」は「第二の転法輪」の契機となる。言い換えると、梵天の勧請が瞑想体験を通じて釈尊が証得した真理を言語化する契機となるのに対し、シャーリプトラの「三請」はすでに釈尊(如来)によって言語化された教説の深層にある真理(一乗)の言語化、すなわち如来の「意図をもって語られる言葉」(saṃdhābhāṣya)の深層にある真意(saṃdhā)の開示の契機となる。

法師達が一乗思想の表明を迫られた時代、釈尊の言葉はすでに三乗を教示するものとして受け入れられていた。一方で釈尊の権威を受け入れるために、他方で釈尊の言葉と矛盾するように見える新しい思想を導入するために、法師達は、新たな方法を考案しなければならなかった。法師達がとった方法とは、saṃdhābhāṣya(〔一乗を教示するという〕意図をもって語られた言葉)としての如来の言葉(bhāṣya)の再解釈、そして、「巧みな方便」(upāyakauśalya)としての三乗の教示や三乗の区分の再解釈であった。

法師達が導入した二つの方法のうち、saṃdhābhāṣyaという語に関して、『法華経』で用いられるsaṃdhābhāṣyaという語が意味しているのは何かという観点から戸田[1967]、松涛[1975]、伊藤[1982]、荻谷[1985]、久保[2007]、松本[2010]をはじめとする多くの研究がこれまでなされている。しかし、法師達が如来の言葉を再解釈するためにsaṃdhābhāṣyaという概念を導入しているという点に注目して「方便品」「比喩品」におけるその用例を分析した研究は筆者が知る限りなされていない。

本稿の目的は、インド仏教における『法華経』の成立と展開という問題をすでに仏説として受け入れられている言葉とその新たな解釈という問題に置き換え、「方便品」「比喩品」から読み取れる法師達が用いた如来の言葉の再解釈の構造を明らかにすることである。

<キーワード> 『法華経』、如来の言葉(bhāṣya)、「意図をもって語られる言葉」(saṃdhābhāṣya)